

# 琉球大学学術リポジトリ

中学校音楽科鑑賞授業におけるパフォーマンス評価  
の研究：  
パフォーマンスを引き出す手立てに着目して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2015-11-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 由美, 山里, 紀子, 石川, 理子, Ogawa, Yumi, Yamazato, Noriko, Ishikawa, Riko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/32375">http://hdl.handle.net/20.500.12000/32375</a>

# 中学校音楽科鑑賞授業におけるパフォーマンス評価の研究

- パフォーマンスを引き出す手立てに着目して -

小川由美\*・山里紀子\*\*・石川理子\*\*

A Study of Performance Assessments in Junior High School Music Appreciation Classes  
-Focus on the Way to Pull Out the Performances-

Yumi Ogawa\* Noriko Yamazato\*\* Riko Ishikawa\*\*

## 1. 問題の所在と研究視点

### (1) 音楽科鑑賞授業における評価の問題

現在、中学校音楽科の鑑賞授業においては、2つの観点で評価を行っている。一つは「音楽への関心・意欲・態度」であり、もう一つは「鑑賞の能力」である。「音楽への関心・意欲・態度」では「その単元（題材）やその授業で扱う音楽や学習活動に対応」<sup>1)</sup>した、音楽や音楽活動への関わり方を見ていくとされている。「鑑賞の能力」では「音楽の諸要素や仕組みを知覚・感受し、それと楽曲全体の構造や特徴とを関連付けて理解したことを言葉などで他者に伝えることができるか」<sup>2)</sup>を見ていくとされている。さらに「鑑賞」の意義には、自分にとって「この曲はどういうものか」と意味づける「価値評価」が含まれているとされ、その意味づけが根拠を持って行われることは「批評」の概念にあてはまるとされている。

ここで問題となるのが、これらの力をどのようにみるかということである。まず、「音楽への関心・意欲・態度」という生徒の内面に関わるものをどのようにみるのかという問題がある。また生徒が、音楽から知覚・感受したことや様々な情報を関連付けて理解していくことが出来ているかどうかは、ある種の筆記テストのように、結果として得られた知識を問うだけの評価方法ではみえてこない。そこで、音楽科鑑賞授業において、生徒が学習内容に関心を持って取り組んでいるか、音楽をどのように捉えているのかを見取る評価方法が必要となってくる。

### (2) 音楽科鑑賞授業におけるパフォーマンス評価

上記のような音楽科鑑賞授業における評価の問

題に答え得るものとして「パフォーマンス評価」が注目されてきている<sup>3)</sup>。「パフォーマンス評価」とは、「知識・技能などを総合的に活用しながら展開される振る舞いやその結果生み出される作品を、直接的に質的に評価する方法」<sup>4)</sup>とされている。横山(2011)は、「音楽科固有の認識過程である『知覚・感受』を基盤に思考・判断したことを表現する行為」である「批評」は、パフォーマンスと捉えられるとしている<sup>5)</sup>。さらに横山・小島(2012)は、パフォーマンス評価によって「外(知識・技能)と内(思考と関心・意欲・態度)がどうつながっているか」<sup>6)</sup>をみることで、内的な能力(鑑賞においては、「関心・意欲・態度」や批評における思考)を見取ることが可能であるとされている。

### (3) パフォーマンス評価におけるルーブリック

パフォーマンスを評価するために必要となるのがルーブリックである。ルーブリックとは、「子どものパフォーマンスの質を段階的に評価するための評価基準表のこと」<sup>7)</sup>であり、数値的な尺度とパフォーマンスを解釈するための記述語から成っている。ただし、ルーブリックで作成される「基準」は、最初から強固に決められているのではなく、複数の採点者が学習者のパフォーマンス(作品)を検討し、その中から典型的な例を挙げるなどして、「根拠のすり合わせ」<sup>8)</sup>をしながら作成していく。よって、評価者によっては同じパフォーマンス(作品)に対して違う解釈が為されるという問題もあるが、「根拠のすり合わせ」を行うことで、信頼度を上げていくことが可能になると考えられる。

\* 琉球大学教育学部 \*\* 琉球大学大学院

#### (4) 研究視点

音楽科鑑賞授業における内的な諸能力を見取ることが期待されているパフォーマンス評価であるが、そのパフォーマンスはどうすれば引き出されるのだろう。

パフォーマンスは「現実的で学習者にとって真実味のある文脈」<sup>9)</sup>において表れるものとされるため、パフォーマンスを引き出すためには「現実的で真実味のある」課題が設定される必要がある。音楽の特徴を捉えた上で、楽曲を自分なりに価値づけていくことが必然となるような課題設定が必要となる。

また「鑑賞の能力」では、自らの価値評価について根拠をもって他者に伝えるところまでをみていくため、他者の存在が大きな役割を果たす。他者に伝えようとするパフォーマンスから、生徒一人一人の音楽に対する知覚・感受の内容や、それを基にした思考、学習内容への関心の度合いが見えてくると考える。

そこで本研究では、鑑賞授業の最後に行う批評文（自分の音楽に対する味わいを他者に伝えることを目的とするもの）作成の場面だけではなく、そこに至るまでの過程もみていく。そして、他者と交流する場面を何度か設定し、それぞれの場面で見られる生徒の発言や反応もパフォーマンスとして捉えて評価していく。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、中学校音楽鑑賞活動におけるパフォーマンス評価において、(a) 生徒にとって「現実的で真実味のある」課題とはどのようなものか、(b) 他者との交流場面がパフォーマンスを引き出す手立てとして有効か、の2点について検証・考察することである。

## 3. 研究の方法

中学校第2学年を対象とした音楽科鑑賞授業を実践し検証を行う。実践記録として、ビデオ録画したものから逐語録を作成する。今回は外に表れたパフォーマンスを主に見ていくため、授業内の発言や身体の動き、ワークシート・批評文の記

述が分析対象となる。検証実践の構想は山里紀子と小川由美の共同で行い、山里が勤務校において実践を行った。そして、逐語録の作成を石川理子が担当した。

## 4. 実践検証の内容

### (1) 音楽科鑑賞授業の構想

#### ①教材について

今回教材として使用した《ボレロ》という楽曲は、1928年にラヴェル (Maurice Ravel, 1875-1937) がバレエ音楽として作曲したものである。この曲は、i) 主題 A、B (図1、図2) のみが様々なソロ楽器によって規則的に繰り返されて出てくる、ii) 全体を通して、演奏している楽器の種類が増え、クレシェンドしている、iii) スネアのたたく2小節単位のリズム (図3) が169回繰り返される、という特徴がある<sup>11)</sup>。



図1 主題Aの一部



図2 主題Bの一部

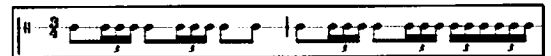


図3 2小節単位のリズム

最初は4種類の楽器で演奏され、最後には24種類もの楽器で壮大に演奏される。全体を通して少しずつ楽器が増え演奏されていくので、テクスチュアの変化が感じ取りやすい。また、全体を通してクレシェンドしながら曲が進んでいくため、強弱の変化も感じ取りやすい。このテクスチュアや強弱の変化により、静かなところからどんどん何か迫ってくるような感じを受けるなど、曲想の変化が感じ取りやすい教材である。

今回は冒頭部分の主題A、主題B、中間部の主題A、結尾部分の主題A、主題Bを特に抜き出して扱った(表1)。冒頭部、中間部、結尾部から抜き出すことにより、比較して聴いた時に、主題Aや主題Bのテクスチャや強弱の変化に気が付きやすいと考える。

表1 授業で扱った《ボレロ》の抜粋部分

	主題	演奏楽器の種類	該当小節	
1	主題A	5	21～39小節	冒頭部
2	主題B	6	41～57小節	
3	主題A	8	95～111小節	中間部
4	主題A	18	239～254小節	結尾部
5	主題B	21	275～291小節	

## ②実践概要

実践対象：沖縄県内中学校第2学年

(男子80名、女子79名、計159名。)

実践時期：2015年1月22日～2月5日

単元名：曲の構成(主題の反復と変化)による曲

想を感じて《ボレロ》を味わおう

教材：《ボレロ》モーリス・ラヴェル作曲

表2 指導計画(3時間配当)

ステップ②	時	生徒の学習活動
【経験】	1	・グループ(グループI)に分かれて曲の一部分を聴き、特徴をつかむ。
	2	・前時とは違うグループ編成(グループII)になり、前時で聴いた音楽の特徴を、その部分の音楽を聴いていない友だちに説明する。 ・友だちの説明を基に、各部分の音楽を聴き直して、その特徴をつかむ。
【分析】		各部分の音楽的な特徴を意識して順番を並び替え、曲の構成(主題の反復と変化)による曲想の変化を知覚・感受する。
【再経験】	3	《ボレロ》全曲を通して鑑賞し、プログラムノート(批評文)を書く。
【評価】		プログラムノート(批評文)を交流する

## ③授業構想の視点

### (a) パフォーマンス課題の設定

今回は、曲の構成(主題の反復と変化)に着目し、《ボレロ》の鑑賞活動を行う。そこで、生徒が曲の構成を理解することで《ボレロ》の味わいをどのように捉えていくのかをみるために、「《ボレロ》の味わいが伝わるよう、曲の構成と曲想との関連を意識した、根拠のあるプログラムノートを書こう」というパフォーマンス課題を設定する。プログラムノートとは、バレエなどの舞台芸術等のプログラムに載っている曲の解説や、聴いてほしいポイントが書かれたものである。そして、曲の構成について考える際に「もし自分が作曲家だったら、全体をどのような曲の構成にするか」という問いを与える。このような問いを与えるねらいは、生徒が自分を作曲家の立場に置き換えて、音楽を捉え直すような状況をつくることにある。自分に引き寄せて考えることで、真実味のある現実的な課題になると考える。

課題に沿ってルーブリックを作成したが、今回は指導要録にある観点別学習状況に示されている評価の観点4「鑑賞の能力」に対応した形を取る。さらに、学習指導過程で何度か評価場面を設定することで、学習の文脈において、生徒がどのように音楽の特徴を知覚・感受し、それを基に思考しているかをみていく(表3)。そして、観点ごとに3段階の尺度と記述語を作成し(表4)、各評価場面における生徒のパフォーマンスを評価していく<sup>13)</sup>。

表3 評価の観点4「鑑賞の能力」

	具体的評価規準	評価の場面
観点4 鑑賞の能力	4-① 担当して聴いている音楽の音楽的特徴や曲想について、説明している。	【経験】 グループIIの活動
	4-② 曲の構成を知覚・感受した内容を説明している。	【分析】
	4-③ 曲の構成を意識して鑑賞し、(ア)曲の構成の知覚・感受による楽曲全体の味わい、(イ)自分なりの価値判断について、人に伝えることができる。	【再経験】

表4 「鑑賞の能力」に関するルーブリック

評価の観点4「鑑賞の能力」	曲の構成（主題の反復と変化）を知覚・感受し、それを基に楽曲全体を鑑賞し、その味わいについて、根拠を持って他者に言葉で伝えることができている。		
	4-① 担当して聴いている音楽の音楽的特徴や曲想について、説明している。	4-② 曲の構成を知覚・感受した内容を説明している。	4-③ 曲の構成を意識して鑑賞し、(ア)曲の構成の知覚・感受による楽曲全体の味わい、(イ)自分なりの価値判断について、人に伝えることができている。
	担当している部分の <u>音楽的特徴と曲想とを関わりあせて、相手に伝えるように身振りを加えたり、具体的な言葉を用いたりして説明している。</u>	曲の構成によって生み出される曲想の変化を感じ取り、 <u>音楽的特徴と結びつけて説明している。</u>	2つの条件について <u>より他者に伝わるよう、音楽用語を用いるなどして、自分の味わいや価値判断を具体的にプログラムノートに書いている。</u>
レベル3	担当している部分の <u>音楽的特徴や曲想について、自分なりの方法で説明している。</u>	曲の構成によって生み出される曲想の変化を感じ取り、 <u>自分なりの方法で説明している。</u>	2つの条件について <u>考え、自分なりの言葉で他者に伝わるようなプログラムノートを書いている。</u>
レベル2	担当している部分の <u>音楽的特徴や曲想について、説明できない。</u>	主題の反復と変化について、 <u>気づいていない。</u>	2つの条件について意識したプログラムノート（批評文）となっていない。
レベル1			

(レベル間の違いは下線、二重下線で示す。)

(b) 他者と交流する場面の設定

今回の授業では、【経験】でのグループIの活動で〈ボレロ〉の一部分を聴く活動を行い、自分たちの担当している音楽が、(i) 主題Aと主題Bのどちらで演奏されているか、(ii) 何種類の楽器で演奏されているか、(iii) その音楽からどのような印象を受けるか、(iv) どのような音楽の特徴があるか、の4点について話し合う場を設定した。この4点を意識することで、グループIIの活動において、自分が知覚・感受した内容を基に他者に説明できるようになると考える。

次に、互いに違う部分を聴いていた者同士が集まって、別のグループ(グループII)を編成し、自分が聴いた音楽について説明する活動を行う。その際に、上記の4点を意識して、音楽から知覚・感受したことや、グループIで交流して気が付いたことを他者に伝えるようにする。グループIIでは、自分以外はその音楽を聴いていない状況であるため、自分が聴いた音楽についての説明を人任せにせず、どう説明すればよいかを一人一人が考えるようになる。

さらに他者の説明を受けてから、互いが聴いていた音楽を聴くことで、友だちが説明していることと音楽の特徴とが結びついていくと考える。ここでは、言葉だけでは分からなかった部分を音楽で共有することで、友だちが伝えたかったことを感じ取ろうとする姿勢が生まれると考える。

【分析】場面では、「もし自分が作曲家だったら、全体をどのような曲の構成にするか」という問いのもと、話し合いを行う。ここでは、互いに自分が聴いた音楽がどのような印象だったかを他者に説明し、それぞれの部分をどのようにつなぎ合わせるのがよいかを話し合う。話し合いをする時には、曲の構成を線であらわして可視化し、他者に分かりやすく伝えることを意識して、意見をまとめる。交流した結果出されてきた、生徒が考えた曲の構成例を、教師がいくつかのパターンに分けて示す(表5)。そして、それぞれの構成例に合わせて音楽をつなげて聴かせ、曲の構成によって曲想がどう変化するのかを聴いて確認する。

曲の構成による曲想の変化を全体で交流した後、【再経験】において、本来の構成(上り坂型)で〈ボレロ〉全曲を鑑賞する。生徒は、〈ボレロ〉

の曲の構成について、全体を通して主題 A や主題 B が何度も繰り返えされながら、テクスチャが薄いものから厚いものへと変化していること、また強弱も変化していることを知覚し、そのような変化によって生み出される曲想の変化について感受したことを基に、《ポレロ》に対する自分なりの味わい（価値づけ）を持てるようになる。さらに「自分が作曲家だったら」という視点で、プログラムノートを作成することで、自分なりの味わいはどうであったかを考えながら、批評していくようになる。と考える。

表 5 曲の構成例

	曲の構成例	テクスチャの変化	強弱の変化
①	山型	薄→厚→薄	弱→強→弱
②	谷型	厚→薄→厚	強→弱→強
③	上り坂型	薄→厚	弱→強
④	下り坂型	厚→薄	強→弱

## (2) 鑑賞領域におけるループリック作成の視点

本実践では、生徒のパフォーマンスから、対象となる音楽をどのように知覚・感受し、それを基にどのように思考・判断・表現しているかが評価できるよう、ループリックを作成した。授業実践前に大まかなループリックの素案を作成し、その後の授業実践での生徒の反応から、その記述語を吟味した（表 4）。

観点ごとにループリックのレベルを「1～3」の3段階に設定し、レベル別に記述語を作成した。どの観点においても生徒はレベル2に達することを基準とし、レベル3の記述語には、主に他者との交流から見えてくるパフォーマンスの内容やこれまでの教科の既有知識を活用している姿を加え、その説明の具体性においてレベル2との違いを意識した。

ループリック作成では、生徒の発言及び反応やワークシート等の記述から、指導内容である「曲の構成」による曲想の変化について、どのように知覚・感受し、それを基にどのように楽曲を味わっているかを見取っていく。特に他者へ伝える（交流）場面で、これらの力が可視化されると考える。

そして、パフォーマンスの解釈を通して、指導内容である曲の構成や学習活動に対する「関心・意欲・態度」も見取っていく。

### ① 観点4「鑑賞の能力」について

今回の実践における「鑑賞の能力」として、曲の構成に関する内容を理解し、自分なりの味わいや価値づけをもって楽曲を捉え、それを他者に伝えられているかをみていく。そのため、主に発言の内容やワークシート・批評文の記述を対象に見取る。評価対象には身体的なパフォーマンスも含まれる。例えば観点「4-①」では、「担当して聴いている音楽の音楽的特徴や曲想について、説明している。」という点を対象に評価するが、言葉での説明だけではなく、実際に声に出して歌うことや手を叩いて音を出すといった様々な表現方法も評価対象に含んでいる。また「鑑賞の能力」では、音楽に対する理解と価値づけの度合いをみているため、観点「4-③」のレベル3では、「より他者に伝わるよう、音楽用語を用いるなどして、自分の味わいや価値判断を具体的にプログラムノートに書いている。」といったように、音楽的特徴についてしっかりと理解し、適切な音楽用語を用いて自分なりの価値づけを他者に伝えられているかで見取っていく（表 4）。

### ② 「音楽への関心・意欲・態度」について

観点4「鑑賞の能力」を見取っていくことで、指導内容である曲の構成に対して、どの程度の関心を持って活動に取り組んでいるかも見取ることが出来る。例えば、観点「4-②」を評価する場面では、「自分が作曲家だったら、どのように曲を構成するか」を説明する状況に生徒を置くことで、曲の構成が話題の中心となり交流が行なわれるような場がつけられる。それにより、生徒がどの程度「曲の構成」に関心を持ち、意欲的に取り組んでいるかが、みえてくるだろう。

曲の構成と曲想の変化との関連を捉えて、自分ならどのような曲の構成にしたいかを、「音楽用語」を用いたり、図（線）を描いたり、手の動きを交えたりしながら、より伝わるように説明している姿がみられれば、指導内容や活動に対して、高い関心が持っていると判断する。

(3) 生徒の反応と解釈

ここでは、授業実践での生徒の反応に対して、ルーブリックを基にどのように解釈したかを観点「4-③」を例に示す。

①ルーブリックによる「鑑賞の能力」の解釈

批評文を対象に解釈する観点「4-③」の評価では、プログラムノート（批評文）に示した2つの条件についてどのような内容で作成しているかをみていった。2つの条件とは、「(ア) 曲の構成の知覚・感受による楽曲全体の味わい、(イ) 自分なりの価値判断について、人に伝えることができる。」かである。それぞれの条件については、プログラムノート（批評文）の(ア)〔曲の構成として、はじめは、～①～終わります。だからこの曲は～②～という感じがします。〕、(イ)〔この曲の気に入っている部分は～③～部分です。なぜなら～④～感じがするからです。〕の記述部分①～④から読み取った。

(ア)の条件では、曲の構成について①音楽の知覚と②音楽から感受した内容の間を合わせ、曲全体の味わいや価値づけを記述している内容を評価した。レベル2の生徒Cは、音楽全体の強弱の変化を知覚し、それを「ゆるやかな坂」と感受している。そして「ゆるやかな坂」を「スキップで軽々と昇っていく」ような味わいがあると捉えている。しかし、「スキップのような軽々とした感じ」が音楽のどの部分から感じ取られたかについては書かれていない。

一方、レベル3の生徒Aは、「落ち着きあるクラリネットのメロディー」によって「上品な気品のある貴婦人」をイメージし、「中盤は華やかなトランペットとフルートの融合、最後には多くの楽器が激しさを増して」いるところは「日々を重ねていくうちに悪女へと転身していく」ことがイメージできるとしている。これらの記述からは、自らの音楽に対する味わいを音楽から知覚・感受したことを根拠に捉えられていることがわかる。また楽器の音色やテクスチュアの変化など、諸要素間の関連についても言及している。

生徒Bは「楽器が重なっていくにつれ、音楽が盛り上がる」ことを知覚し、それによって音楽全体を「結婚式」と捉え、「新郎新婦入場」から「カ

表6 観点「4-③」における生徒の反応

		批評文の記述（原文ママ）
レベル3	生徒A	①落ち着きのあるクラリネットのメロディーから、中盤は華やかトランペットとフルートの融合、最後には多くの楽器が激しさを増して。 ②上品な気品のある貴婦人が日々を重ねていくごとに悪女へと転身していく。 ③最後の激しさが増す。 ④勇ましく勢いのあるメロディーに思わず私まで興奮が押さえられなくなる。
	生徒B	①楽器の数を次第に多く（重ねていって）終わりに向かうにつれ、音が盛り上がっていくかんじ。 ②結婚式というイメージがします。なぜなら、「新郎新婦入場」でなめらかに、どんどん盛り上がっていった、カチャーシーで楽しさ爆発という。 ③1番最後の盛り上がる。 ④たくさんの楽器が使われていて、とても楽しい祭りっていう感じで、自分がとてもワクワクする。
レベル2	生徒C	①小さな音で終わりに近づくにつれて大きい音を出しながら。 ②ゆるやかな坂をスキップで軽々と昇っていく「ゆるやか昇り坂」。 ③一番最後の。 ④これまで静かにためてきた自分の感情を曲に乗せて、一気に外に出している。

チャーシー」までの流れに例えている。沖縄では「結婚式」や宴会等で場の盛り上げや終盤に「カチャーシー」という踊りが欠かせない。つまり生徒Bは、自らの生活経験を想起して、音楽を自分自身に引き寄せて感受しており、そのように感じた根拠は「楽器の数」や「強弱」の変化にあると捉えていることがわかる。

以上のように、レベル3の記述では、楽曲全体に対する味わいや価値づけを、自らが知覚・感受したことを根拠に具体的に記述されており、諸要素間の関連も意識されている。レベル2の記述では、強弱の変化に対する知覚・感受を基にした味

わいは書かれているものの、「スキップで軽々と昇っていく」という感受に対して、そのように感じた根拠が示されていないなど、レベル3に比べて具体性に欠ける部分があった。

次に(イ)の条件の「自分なりの価値判断について、人に伝えることができているか」をみていく。レベル3の生徒Aは、「最後の激しさが増す」部分について、「勇ましく勢いのあるメロディー」によって「私まで興奮が押さえられなくなる。」と価値づけている。この記述からは、《ボレロ》が終わりに向かって盛り上がっていく部分に、強く魅力を感じていることが伝わってくる。また生徒Bも「一番最後の盛り上がる」部分では、「たくさんの楽器が使われていて、とても楽しい祭りって感じで、自分がとてもワクワクする。」と価値づけており、音楽から受けた印象を「ワクワクする」という自身の感情と関連させ、さらにその音楽的根拠も明示している為、具体的で分かりやすい内容となっている。このように、自分なりの楽曲に対する価値づけについて、音楽的諸要素と関わらせて捉えられており、その説明がより具体的な内容になっているものはレベル3とした(表6)。


②「音楽への関心・意欲・態度」の見取り

ここでは、生徒のパフォーマンスから「音楽への関心・意欲・態度」をどのように見取っていったかを示す。その例として、観点「4-②」の評価を行う場面を取り上げる。生徒が「自分が作曲家だったらどのような曲の構成にするか」を話し合う場面において、生徒Dは、「曲のサビ」が一番の盛り上がりだと感じ、それがどこにくるのかについて、手の動きを交えながら伝えようとしていた。これは、曲全体の流れを身体的に表して伝えようとする姿と言える。このことから、曲の構成に高い関心を持って活動に取り組むことができていると解釈した。

また、生徒同士が曲の構成について話し合った結果出されてきた4つの「曲の構成例」を、実際に音で比較聴取し、その曲想の変化について記述したワークシートからは、生徒が曲の構成による楽曲全体の曲想の変化に関心を持って聴いていることが見えてくる。

例えば、生徒Eのワークシートでは、主に強弱の変化とそれに伴う曲想の変化について、両者に関わらせながら捉え、さらに音楽の流れを意識した記述が多くみられる。曲の構成という音楽の全体的な流れについて強い関心をもって説明していることが読み取れる。さらに生徒Eは、③の波線部「なんかこれっぽい気がする」と記述しており、ここからは、作曲家の立場に立って曲の構成を意識していることが読み取れる(表7)。

表7 観点「4-②」における生徒の反応

	◎反応 ★ワークシートIの記述 (原文ママ・カッコ内は筆者による加筆)
生徒D ◎反応	「真ん中が大きくなって、ブワーって盛り上がったらさ、サビって感じがするさ。こーんな感じ(両手を使って  の形を描く。)」
生徒E ★WS I の記述	①(下り坂型)・最初と中ばんで盛り上がって、最後はなめらかに終わるカンジだった。 ・テンションの差が激しい気がする。 ②(谷型)・最初明るく、中ばんはおちついてなめらかで最後にドーンと盛り上げるカンジ。 ・こっちもテンションの差が激しい。 ③(昇り坂型)なめらかに始まって、最後で激しくなっていく。 ・どんどん大きくなっているの、 <u>なんかこれっぽい気がする</u> 。 ④(山型)・2つめから急に盛り上がって4つめで急に下がってそのままおわり…となったので、何か少し不自然な気がしました。

5. 結論と考察

(1) 生徒にとって「現実的で真実味のある」課題となっていたか

今回、「自分が作曲家だったら」という視点でプログラムノートを書いていくという状況を作ることで、生徒は作曲家がどのような意図で曲を構成しているのかを考えるようになった。そして、自分の生活経験を想起して、これまで聴いてきた



音楽がどのような構成だったか、といったことを手がかりに話し合いを行っていくようになる。そうすることで、「カラオケで歌うような歌は真ん中の部分が盛り上がっている曲が多い」とか「だんだん盛り上がって、最後にフィナーレって感じで終わる方がいい」といった発言が出てくるようになり、身振り手振りを交えて、自分の考えを伝えようとする姿が見られるようになった。

これらのことから、音楽科鑑賞授業においては、生徒が自分の視点から考えられるような状況を作ることが、生徒のパフォーマンスを引き出すためには重要であることが見えてきた。ただし、今回は「曲の構成」という楽曲全体に関わる音楽の特徴を指導内容としたために、直接的に「作曲家の立場」という状況に置き換えやすかったと考えられる。指導内容や楽曲の特性によって、パフォーマンス課題の設定は様々になるだろう。ただし、批評文を書いて人に伝えるという状況設定だけでは、生徒にとって「現実的で真実味のある」課題設定にはなりにくいと考えられるため、教材の特性、単元構成を吟味して課題を設定することが必要だと考える。

## (2) 他者との交流場面がパフォーマンスを引き出す手立てとして有効であったか

他者との交流が生徒にとって必然となるよう、それぞれが違う部分の音楽を聴いて、その情報を持ち寄り楽曲の全体像について予想する場面が設定された。そのことにより、自分の持っている情報が他者にとって有益なものであることが自覚され、情報収集のために、何度も音楽を聴き直す姿が見られた。そして、聴いている音楽の特徴について友人に尋ねたり、手を叩いてリズムを確認したりと、積極的に楽曲の特徴を捉えようとしていた。

このような場面設定により、ただ音楽を聴いて気づいたことや感じたことを述べるだけの状況とは違い、高い目的意識を持って音楽を聴こうとする姿勢につながったと考えられる。ここから、他者との交流場面はパフォーマンスを見取る場としては適切であると考えられるが、学習者自身にとって、他者に伝えることが必然的な状況を作ることが重要であることが見えてきた。

## (3) 評価の見直しによる授業改善について

今回、「〈ボレロ〉の味わいが伝わるよう、曲の構成と曲想の関連を意識した根拠のあるプログラムノートを書こう」というパフォーマンス課題に対して、全体的に概ねもしくは十分に課題が達成されていることが見えてきた。特に、グループⅠからグループⅡに行く際、自分自身しか知り得ない情報（音楽を形づくっている要素や曲想など）を自身の言葉で説明し、それを基にまたグループで話し合い、「自分たちが作曲家だったら」という問いのもと、曲を構成していくことにより、意欲的に〈ボレロ〉を鑑賞しようとする姿が見られた。そして、曲の構成（主題の反復と変化）を知覚・感受し、それをもとに楽曲全体を鑑賞し、根拠をもって他者に言葉で伝えることができていた生徒が多く見られた。

また、「4-③曲の構成を意識して鑑賞し、(ア)曲の構成の知覚・感受による楽曲全体の味わい、(イ)自分なりの価値判断について、人に伝えることができている」かについては、批評文の記述から、他者との交流を通して〈ボレロ〉という曲に対する自分なりの価値観が身につけていることが見えてきた。

授業後に実施したアンケートからは、今回の鑑賞授業により、生徒の鑑賞活動に対するイメージが変容したことが見えてきた。今までは、鑑賞活動を「曲を聴いて全体で共有し、感想を記入するだけでねむたくなる」といったマイナスのイメージで捉えていたのに対して、「今まで経験したことのない角度で音楽を見た気がする。」とする意見や、「細かいところまでグループで学べたのがとてもわかりやすかった」など自身の鑑賞の考え方が変わった、という意見を述べている生徒が多数いることがわかった。評価を見直すことで、授業内容そのものの改善も図られたのではないかと考える。

## 【註及び引用・参考文献】

- 1) 小島律子監修(2011)『新訂版 小学校音楽科の学習指導一生成の原理による授業デザイナー』廣済堂あかつき, p.42
- 2) 同上書, p.44
- 3) 音楽科鑑賞授業におけるパフォーマンス評価に関する先行研究には、横山(2011)、薄田(2013)がある。また音楽科におけるパフォーマンス評価に関する先行研究には、小島・横山(2012) 小山(2013)、薄田(2014)がある。
- 4) 石井英真(2010)「第8章 アメリカの場合—カリキュラム設計における『工学的アプローチ』の再構築へ」松下佳代「“新しい能力”は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー—」ミネルヴァ書房, p.252
- 5) 横山真理(2011)「中学校音楽科鑑賞授業領域の授業における『批評』のルーブリック開発の視点—『逆向き設計』論を活用した単元の再設計を通して—」教育目標・評価学会紀要第21号, p.68
- 6) 横山真理・小島律子(2012)「パフォーマンス課題における音楽的思考過程の質的評価」大阪教育大学紀要第V部門教科教育第61巻第1号, p.71
- 7) 松下佳代(2007)『日本標準ブックレット No.7 パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準, p.23
- 8) 前掲書4), p.256
- 9) 前掲書4), p.252
- 10) 前掲論文6), p.60
- 11) Eulenburg (1994)『ラヴェル ポレロ』全音楽出版社
- 12) 高橋澄代、小島律子(2009)「音楽科における思考力を育成する単元の構成原理」『大阪教育大学紀要』第V部門教科教育第57巻第2号, p.92  
ここでいうステップとは、ジョン・デューイの学習理論を基に導き出された学習の方法的段階であり、「経験・分析・再経験・評価」という方法的段階を踏むことで、思考は一つのまとまりを得るとされている。
- 13) ルーブリックの作成には、松下佳代(2007)『日本標準ブックレット No.7 パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準, に掲載されているルーブリック表を参照した。

## 【附記】

1・2・3・5(1)(2)は小川由美、4(1)及び5(3)は山里紀子、4(1)の一部及び(2)(3)は石川理子が分担執筆した。